
知らなきゃ良かった

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らないきや良かった

【Nコード】

N7263J

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

美少女を彼女にできたノーマルな男、武満 勇介。しかし天にも昇る気持ちも束の間。彼はある日、彼女の隠された謎を知ってしまう。

(前書き)

勢いで書きちゃった作品です。コメディなのか恋愛なのやら、自分でもよくわかりません。

最近、俺に彼女ができた。

神崎弓かんざきゆみという、16歳で俺と同級生の女子だ。みんなが彼女を見たら抱く第一印象は、天真爛漫の美少女だ。

年齢に見合った平均身長。玉子形の小さな顔、柔らかそうな薄いピンクの唇。二重瞼に大きくつぶらな黒い瞳と、全体的にプリティーでセクシーに整っている。

髪型はひと月ごとに変えるのだが、どれにしても似合っていた。最近のスイングミディになっている。

発育も良い。あ、いや、これは別にやましい理由で良いと言った訳じゃない。とにかく、周りも口にするくらい彼女は運動、学力共に優秀で可愛いんだ。

誰もが認める女の子。八方美人とは彼女の為にあるのではと思う。そんな彼女はモテても良いはずなんだ。事実、彼女はいろんな男子から告白を受けていた。モテている――けれど、その後が謎なんだ。

彼女がOKを出して付き合うまでは良い。けど、それが数日したら別れてしまうってのはどういうことだろうか？

着目すべきは、振ったのは必ず彼女ではなく、付き合っていた男子の方だということ。

……何故だ？

申し分ない外貌と愛嬌を兼ね備えている美少女を、何故に男側が振る？

俺が告白して彼女にOKを貰い浮かれてた時、以前彼女と付き合いっていた男がふらりと俺の前に現れ、忠告をしてきた。

「止めた方が良い。まず、絶対に吐く」

『吐く』って何だよオイ！

意味がまったく理解できん。しかし神妙な面立ちでそんなことを言われると冗談には思えない。気になった俺は、今まで彼女と付き合っていた男子達に訊いてみた。

すると全員が同じことを口にした。

事の真相を得るため追求をしたが、彼らはそれ以上は黙して語らずで、寂しげな背中を向けて去り行くばかり。

まるで、見てはいけない何かを目にしたような、喪失感で心は空っぽだと、死んだ魚の眼をしていた。

マジで何なのか気になる……。

俺は不安と疑問を抱かずにはいられなかった。けれどそんな俺の複雑な心境とは裏腹に、恋仲になってからの彼女は、廊下や教室などで顔を会わせる毎に、とてもキュートな笑顔を見せてくれた。そんな反則な笑顔を前にして、俺の心は躍らずにはいられない！

だが、隅っこに潜む自制心が、『油断するな！ 油断したら吐くぞ！』と規制を訴えてくる。

深層心理にあるチキンな心が意味不明の警告を発するせいで、彼女との関係は恋仲になり始めてからの進展は無く、一步も踏み出せない状態だった。

そんな日々の中――。

「勇介君、明後日の日曜日なんだけど。一緒に都心へ買い物に行かない？」

デートの誘いが来た。

特に断る理由もない初のデート。

嬉しいのは確かだ。しかし、男達の言葉が脳裏を巡り、どうにも引っ掛かる。

それでも断るのは嫌だし、彼女の気分を損ねてしまうのはもつてのほかだ。そうした高揚感と一抹の不安を抱えながらも俺は、首を縦に振った。

その日は、大変充実に満ち溢れていた。彼女との買い物は本当に楽しい。俺が彼女の買い物袋を進んで持つと、お礼を言った彼女は嬉しそうに俺の腕にくっついた。交差点を渡る中、すれ違う野郎共が羨ましいと視線を向けてくるのは、実に爽快な気分だった。

自分は今、恵まれていると改めて実感した。

「勇介君、今日は本当にありがとね。お腹空いたし、どこか食べに行く？」

「どこが良いかな？　俺が奢るよ」

「え、悪いよ。勇介君には付き合ってもらって、荷物まで持ってもらっているし……私が奢るよ」

「良いつて。それに荷物は俺が好きで持っているんだしさ」

「ううん、でも……」

「いや、良いんだって。言うて恥ずかしいんだけどさ、俺も男だし、彼女の前でくらい格好つきたいから」

そう口にして俺は、彼女の頭を撫でてあげた。髪がふわふわしていて気持ち良いな。しかし今思うと、この言動も思考も、かなりキモい真似をしたものだ。キモいと分かっているながら、女の前では無意識にアピールしたくなるのは男の性か。

「……ありがとう」

けれど俺の些細な自己嫌悪など余所に、彼女の反応は良かった。思わず指で突っつきたくなる柔らかそうな頬を赤く染め、照れ隠すように控えめな声調で言う、嬉しそうな笑みを浮かべた。

うう、やっぱり可愛いぞ！

なんていうか、守りたくなる。ああ、何で今までの野郎共はこの

子を振ったんだ？

何だか許せない気持ちになってくる。ふと不思議に思う。この子が何故、俺のようなノーマルな奴と、こうして付き合ってくれているのかを。

振られたのは一回じゃないはず。男性不信に陥ってもおかしくないだろうに。俺も、中学で好きな女子に告った時――。

『はっ？ キモいんですけど』

などと言われ、しばらく登校拒否の状態になった事がある。それだけ振られるってのはキツくて辛いんだ。人によっては自殺したくなる。それを多く体感している彼女は、少なくとも俺以上の傷を抱えているはずだ。

にもかかわらず、こんな俺の告白を受け入れてくれた。けれど彼女はあっさりOKは出さず、最初にこう訊いてきたっけ。

『私なんかのどこが好きなの？』

とても意外な質問だった。自分に自信の無い人特有の問い掛けだったのだから。

そんな彼女に戸惑いつつも、俺はこう答えた。

『全部です。俺、入学式の時からずっと神崎さんに好意を抱いてました！ 今までずっと言えませんでした。神崎さんが付き合っていると聞いても諦められない気持ちでいっぱいでした。神崎さんが彼氏と別れた後で告白なんてデリカシーが無いと思われます。でも……それでも、今しか伝えるチャンスは無いから！』

そしてもう一度、勢いに身を任せて俺は力強く『付き合ってください』と叫んだんだ。そしたら彼女、涙目になって頷いてくれたたな。

ああ、これは一生忘れられない思い出だ。

馬鹿だ俺――そうだよ、何も気にすることはない。彼女が何であろうと、みんながドン引きしてしまう性癖があっても、俺は彼女の

全てを受け入れるべきだ！

自分がいかに矮小で愚か者だったかに気付いた今、俺の覚悟は決まった。

吐こうが構うもんか！ 俺は彼女のゲロすら受け入れる！

自分でも意味不明なその決意を内に表明し、俺は拳を胸元で握り締めた。彼女を外した周りの人達から、『何だコイツ？』と痛々しい奇異の目線を感じたが、最高にハイな状態になった今、もはや視線など気にならなかった。

そうした流れのまま、彼女行付けの喫茶店に立ち寄った俺達は、テストが難しかったとか、この番組は面白かったと趣味の話など雑談をしながら食事を済ませた。行儀が悪いなどと思わないでくれ、口内に物含んだままモゴモゴ喋ってはいないから。

「美味しかったね」

「……うん」

「さてと——あ、すいません！」

彼女はまだ食い足りないらしく、通り掛かりの店員にスイーツを注文した。

彼女曰わく、食後にはコレは欠かせないのだとか。俺も同じものを注文したのだが……それから数分後。

「食わないの？」

「ああ、俺はお腹いっぱい」

「そっか、じゃあ私もこのくらいにする」

十二皿分もパフェを食して“このくらい”って……。

俺は見てるだけで腹一杯なんだけどな。吐くぞって男達の言葉は、こういう意味だったのか？

彼女の暴飲暴食が原因で吐き気を催したから別れた——だとすれ

ば、それは愚かしいとことだ。これくらい誰でも堪えられるだろうに。

レジで支払いを終え、俺達はその辺のショッピングモールを回った。

うん、やはりこれ以上の異変はないな。どうやら、他の男共は単に彼女の食欲旺盛さに嫌気が差しただけみたいだ。嗚呼、心配して損した。しかしこれで気兼ねなくデートを満喫できるな。

そんな安堵感に溜め息を漏らすと――。

「あれ？」

彼女が何かに首を傾げていた。前方を見ると、木の枝に引っ掛かった風船を取ろうとピョンピョン跳ねる女の子がいた。

「もう諦めなさい」

隣にいる母親が少女を宥めるも。

「やだやだ！ 風船取りたい！」

制止も聞かずに少女は無駄な跳躍を繰り返す。

何だか放っておけないな。よし、取ってあげるか。

中学時代バスケ部のレギュラーだった俺ならあの高さくらい、助走を付けて跳べば取れるはずだ。

「取ってあげよう」

「うん」

俺は頷く彼女を一瞥してから走り出した。

次第に距離が縮まったところで――ジャンプ。

「よっ！」

これなら届く、後は手を伸ばすだけ――と、その時だ。

「キシャアアア！」

背筋に悪寒を感じさせるおぞましい奇声、共に俺の頬を後方から横切る形で何かが過ぎ去り、風船の方へと向かって行く……って、

何だありゃあ！

芋虫が！ でっかくてムカデみたいというか、アゲハ蝶の幼虫つつうか。それらをミックスしたようなのが風船に食らいついた！クワガタのハサミを連想させる顎で風船をくわえたが、何故か割れない。割れないように力緩めてくわえてるのか？

啞然としてしまう光景に、スベスベの歩道へと着地した俺。

風船くわえた芋虫は、口をぱっくり空けたままの女の子に近づいて、うねうねと長い胴体を動かしながら手前で制止した。あれか？風船を受け取れて言ってるのか？

「キャアアッ！」

先の怪物の奇声に負けないくらい、張り裂けそうな声を轟かせる親子。そりゃパニクるわっ！

「うえええん！ 待ってママあ！」

お母さんひでえよ、女の子を放って逃げやがった。迷わずエスケープかよ！

母を追いかける女の子を見てどうしようと困惑したが、それよりもこのグロイモンスターはいつたどこから現れたのやら。

気になった俺は、モンスターの胴体の先を辿って目を走らせた。そうすると、驚くことが分かってしまった。いやもう、知らないきやよかったよ！

だってモンスターの出現ポイントが、彼女の口からだったんだもの！

口をあんぐり開けて、その中からこの芋虫がうねうね……グ、グロい。バイオハザードのプラーガかよ！ マジニよりひでえよこれ！

ビチヨビチヨと不快な水の跳ねる音を鳴らして、虫は彼女の中へと戻って行く……のか？ まあそういうことにして、その虫はくわえていた風船を彼女に渡し、お腹の中へと帰って行った。

「ふう、風船取ったのに、行っちゃったね……。勇介君？」

ちよつ、あんなのを見せておいてノーマルに振る舞うのかよ。てゆうか、だ、ダメだ……吐く！

「うえええっ！」

「うわっ！ ゆ、勇介君、大丈夫!？」

ごめんなさい、大丈夫じゃないです。覚悟決めたはずだけど。あんなの見て、堪えろってのは無理です。

てゆうか、吐くって——こういう意味だったのかよおっ！

太陽が沈む頃、俺達は高層マンションに囲まれた人気の無い小さな公園に来了。ここに来るまで、会話は何一つなかった。だって何から話せば良いのか解んなくなっちゃったんだもん。それにあの芋虫が何なのかも聞くの恐いしさ。

これでチキンな俺を責める人いたら、もう鬼だよその人。

「ごめんね、さっきの驚いた？」

「……うん」

俺と彼女は今、ベンチに腰掛けている。隣りに街灯がポツンと立つこの場所に二人だけの空間。本来ならもっとロマンチックな感じになるはずなんだけど、生憎あんなおぞましい物をお目にかかった後では、そんな気分にはなれなかった。

ドキドキしてはいるけどね、真逆の意味で。

「勇介君、さっきからずっと黙ったままだけど、もしかして私の口から出たあれを気にしてる？」

「う、うええっ！ いや、気にしてはいない……と、言いたいけど」

やっぱり気になるし、聞ける時に聞いた方が良さだろう。今聞いておかないと、夜は眠れそうにない。俺は若干口ごもりつつも頷い

た。

「私ね。寄生虫使いなの」

「き、寄生虫使い？」

寄生虫使い——これは彼女から聞いた話しなのだが、寄生虫使いとは体内に寄生虫を飼っていて、その寄生虫を使って要人を暗殺やら、敵の体内に寄生虫の卵を産みつけて、産まれた幼虫にテレパシーみたいな感じで指示を送ったりして、裏で敵を操って情報を得たりと、いろんな暗躍を行う忍者の一族なんだとか。彼女はその末裔らしい。

「でもまあ、神崎家はもう要人暗殺とかの物騒な仕事からは足を洗ったんだけどね」

そう言って愛らしく笑う彼女。暗殺とかから手を退いたのは本当に嬉しいことだけど、何ていうか、真実を知ったら知ったで恐ろしい。御陰様で俺の心拍数はいつもよりも高い。

「そ、そうなんだ」

上手く笑顔を作れずして言葉を返した俺だったが、そんな態度を察した故に気分を害したのか、彼女の表情から笑顔が消えた。

「勇介君、私のこと嫌いになった？」

顔を俯けて彼女は呟いた。

思わずドキッとした。しかし残念ながら、これはけっして良い意味では無い。気まずいというニュアンスでの鼓動だ。

「あ、いや、俺は」

「いいよ、無理しなくて」

俺はしどろもどろな振る舞いの中で、どう答えば良いかと必死に脳内で検索していたが、対する彼女は諦めたような落ち着きのある表情で語り掛けた。

「私自身も分かっているから、普通じゃないって」

「神崎さん……」

凄く悲しい顔をしている。

うぐ、見てると心がチクリと痛む。罪悪感が芽生えるな。いや、態度からしても俺に非があるか。そんな複雑な心境である俺の隣りで、彼女は目を伏せて話しを続けた。

「みんな怖がって近寄らないのは仕方ないことだね。だけど、これは隠してもいつかはバレてしまうこと」

俯けていた顔を上げて、もう半分しか覗かせてない夕陽を見て、彼女は寂しげに微笑んだ。

「それでも、私のそういうところも受け入れてくれる人がいるって、私は信じている。だから隠さないことにしてるの」

「……それ、神崎さんを振った男にも言ったの？」

「うん。けど、やっぱり無理だった。みんな私に謝って別れちゃった。けどその後も気を使って黙っててくれている」

ようやく男達の不可解な言動が解った。彼らは彼女が好きでも、付き合っていく自信が無かったんだ。一緒にいても、いずれは自分が精神的に参ってしまうから。それなら、早い内に別れてしまえばショックも小さいと思ったのだろう。

けれど、仮にそうだとしても、自分を好いてくれる人が別れるってのは、突き放される側が辛い事にならないんだ。

付き合ってほしいと告白した時点で、最後まで責任を持たないと駄目なんだ。

「実はね私。勇介君が私に不安を抱いてたの知ってたんだ」

「え……」

「今日のデートに誘ったのも、その不安を知りたかったからなの。もう分かっちゃったけどね」

「ごめん……」

「ううん。誰にだってそういう他人に対する不安はあると思うよ。だから、私は受け入れる。自分は受け入れなくて、それで他人に受け入れてもらおうなんて、おこがましいもん」

彼女は、俺を受け入れていた。何の一点の曇りも無く、俺に怒りを抱くことなく。

それに比べ俺は何だ？

うじうじと芋虫みたいに……最低だよ。こんな覚悟で彼女と付き合おうなんて、これこそおこがましいじゃないか。

「今日はごめんね、嫌な気分になせちゃって……」

俺は彼女のこと何一つ受け入れてないじゃないか！

「別々に帰ろうか？ 一緒には、やっぱり嫌だよ」

告白の際に彼女に言ったことは嘘だったのか？

ふざけんなッ！

違う——俺は、彼女が何であろうと、彼女が好きなんだ。だから、告白したんだ。

自分の不甲斐なさに反吐が出る。

今になって、本気で彼女が好きだと自覚するなんて。

「それじゃあ、また学校で——」

「待って！」

ベンチから勢いよく立ち上がり、俺は去り行こうとする彼女を引き止めた。

「嫌じゃない、一緒に帰ろう。いや、家まで送る！」

「勇介君……でも」

「受け入れるよ俺は！ 俺は他の奴らなんかと違う。自分から告白した以上、自分の言葉に責任を持つ」

全てをぶちまけるように、俺は言った。

「今ここで、もう一度言うよ神崎さん。俺は、君のことが大好きだ！ 君の全てが大好きだ！ 逃げずに君の全部を受け入れる！ 神崎さん。改めて、俺の……俺の彼女になってください！」

長い沈黙が続いた。辺りはすっかり暗くなり、公園の街灯が光を灯した。

俺達二人を光が囲む中、息を切らしながら俺は、彼女の顔を恐る恐る見上げた。

彼女は泣いていた。

大粒の涙を頬に滴らせて、俺を茫然と見つめていた。

「ありがとう……ありがとう勇介君」

彼女は俺の胸に飛び込んでわんわん泣いた。

今まで我慢していたのかもしれない、自分を本当に受け入れてくれる人に出逢うまで、ずっと知らないところで涙を流していたのかもしれない。

……俺は、一生彼女の理解者でいよう。

彼女を強く抱きしめて、そう心に決めた。

『見上げた男だ！ 武満勇介！』

「えっ？」

今、彼女の口から変な野太い声が聞こえたんですけど？

「あ、ヘンゲルさん？ 勇介君、ちょっと離れてて」

「あ、ああ」

二、三步距離を置くと、彼女は口からあの寄生虫を出した。

『ふふふ、私からも主を受け入れてくれたことを礼を言うぞ、武満

勇介』

五角形の口を器用に動かし、虫は語る。

『これからも、というか一生彼女に付いてやってくれ。じゃなきゃ殺すから』

「へんへるしゃん、もうもろってひよ」

彼女が何か訴えている。口を開けたままモゴモゴと言っているが多分、『ヘンゲルさん、もう戻ってよ』と口に行っているに違いない。

『おお、そうだったな。すまんすまん。では、またな勇介君』

ヘンゲルさんはそう言って、彼女の中へと戻っていった。

……って。

「喋れるのかよオオッ！？」

冬の寒空、俺の叫びが虚しく児玉した。

俺の苦難は、まだまだ始まりに過ぎなかった。

終

(後書き)

どうもです。玉藻伝の執筆を向上するために書いた作品なのですが、もし評価や感想が多かったら続き書いてみようと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7263j/>

知らなきゃ良かった

2010年10月8日15時12分発行